慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J・E・T・エルドリッジ著『C・W・ミルズ評伝』
Sub Title	J.E.T. Eldridge, "C. Wright Mills"
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1984
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.57, No.12 (1984. 12) ,p.61- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19841228-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

J.E.T. Eldridge,
C. Wright Mills
Ellis Horwood Limited and Tavistock Publications. 1983, pp. 128.

J・E・T・エルドリッジ 著
『C・W・ミルズ評伝』

(一)

個人的問題をたえず公共の問題に翻訳し、公共の問題をそれがさまざまの人びとにとっていかなる人間的意味をもつのか、という形に翻訳すること、それが社会科学者の——すべての自由な教育者にとっても同じであるが——政治的任務である。こうして社会学的想像力をその仕事のなかで——教育者としてはその生活のなかで——展開することが、かれの課題なのである。(C・W・ミルズ著(鈴木広訳)『社会学的想像力』二四六頁)

この冒頭に引用したミルズ『社会学的想像力』(原典一九五九年)は、『ホワイト・カラー』(一九五一年)、『パワー・エリート』(一九五六年)等と並んで社会学徒に限らず広く読まれ続けてきた書物の一つである。われわれの日常的な生活における喜びや不安、苦痛と現代社会の歴史的な動きや公共的な諸問題とを相互に関連づけていくことを、ミルズは自ら実践し、果敢に告発し続けた。そして、ミルズは、一人のアメリカ市民として、生活者として、知的職人として、批判的社会科学者として、四五才の短い生涯を閉じた(C. Wright Mills, 1916—1962)。しかし、彼の著作活動のいずれもが鋭く問題を突きつけ余りにも論争的であり、彼の生涯が余りにも短く劇的であったために、その都度広くとりあげられることも多かったとしても、彼の生涯にわたる著作を全体的に考察する試みはいまだに充分なされていない。

現代社会学の状況に照せば、構造=機能主義、マルクス主義、闘争理論、象徴的相互作用論、エスノメソドロジー、交換理論、構造主義、批判的社会理論、等価機能主義などの諸視座が競合化し、拮抗し交錯しているなかで、ミルズは第二次大戦後にいち早く当時のいわば正統派社会学、主に構造=機能主義に対する批判の先鞭をはたしたのであった。彼をニュー・レフト、「新しい社会学」、ラディカル・ソシオロジーの先頭に立たしめたのは何んであったのか。ミルズの中心的な関心の領域であった

知識社会学的考察が彼にも向けられてしかるべきであろう。

イギリスの社会学者J・E・T・エルドリッジによる本書『C・W・ミルズ評伝』は、構造＝機能主義以後の諸視座や理論に急斜し続け、ミルズ社会学は半ば忘れられかねない今日の状況のもとで、小著ながら、ミルズを依然として明らかに重要な鍵となる社会学者（a key sociologist）として再評価しようと試みたものである。

本書は、P・ハミルトンを編者とする叢書、Key Sociologistsの中の一書をなしている。この叢書には、他に本書同様主にイギリスの執筆者によるP. Worsley; Marx and Marxism, F. Parkin; Max Weber, K. Thompson; Emile Durkheim, P. Hamilton; Talcott Parsons, R. Bocock; Sigmund Freud, T. Bottomore; The Frankfurt School, D. Frisby; Georg Simmelなどが入っている。

なお、本書の著者は一九七二年以降はグラスゴー大学の社会学教授であり、産業関係論、産業社会学、組織論、社会学思想を中心に研究活動を進めてきた学者である。著書には、Industrial Disputes: Essays in the Sociology of Industrial Relations, 1968, Sociology and Industrial Life, 1971, Max Weber: The Interpretation of Social Reality (edited and with an introductory essay by J.E.T. Eldridge), 1971, A Sociology of Organization, 1974, Recent British Sociology, 1980, などがある。

（二）

この「主要社会学者」（Key Sociologist）叢書は、各々の学者の研究、生涯、影響を包括的に跡づけることを意図している。本書『ミルズ評伝』も、ほぼそうした意図に従って、(i)ミルズに与えた知的影響とそれに対する彼の反応――いわば、ミルズにとっての知的環境、(ii)ミルズの主な著作についての批判的解説――主要な著作についての全体的な概観、という二点を軸にして展開される（一四頁）。章の構成はきわめて簡潔で次の通りである。

第一章、文化的職人の形成
第二章、知的職人
第三章、結論―（鍵的な）主要社会学者か？

第一章「文化的職人の形成」では、ミルズが一九一六年八月にテキサス州で中流・カソリック教徒の家庭で生まれ育ってから、一九六二年三月にニューヨーク州で急逝し短い生涯を閉じるまでの彼の思想形成、知的遍歴が要領よく跡づけられている。

まず、「テキサスからウィスコンシンへ」においては、牧場主であった祖父とは対照的に保険代理店を営む父のもとでテキサス州内を転々とした少年時代の必ずしも幸せではなかったとする指摘がミルズのホワイト・カラー論との関連で叙述される。しかし、曲折の後に入学したテキサス大学では主に哲学を学び、その知的環境は極めて刺激的であり、ミルズは学問的巡礼を始

めていくことになる（一五頁）。特に、T・ヴェブレンのかつての同僚であったC・エイアーズ（Clarence Ayers）と、かつてG・H・ミードに師事しプラグマティスト達の著作をミルズに紹介したG・ジェントリー（George Gentry）との出会いはミルズの思想形成と文化的伝統の継承という点で影響が大きかった。社会批判・利害葛藤・社会分析などの基本的視座、Peirce, Mead, W. James, Dewey 等のプラグマティズムの知的伝統を受け継いでいくのである。

一九三九年には、ミルズは大学院生（博士課程）として、当時E・A・ロスが社会学部長をやっていたウィスコンシン大学に進学した。ここで、ミルズの学問活動上で重要な師であり後に協力者ともなったH・ガース（Hans Gerth）と出会う。H・ガースは、かつてフランクフルト社会調査研究所の学生でありナチスドイツを去ってウィスコンシンにやってきた学者であり、ヨーロッパ社会思想に造詣が深く比較研究に強い関心を寄せていた。ガースを通じて、マルクス、ヴェーバー、マンハイムなどの研究がミルズへ伝えられる側面にも検討が加えられている。特に、ミルズの初期論文「言語、論理と文化」（一九三九年）、「知識社会学の方法論的結果」（一九四〇年）、「状況化された行為と動機の語彙」（一九四〇年）、『マックス・ヴェーバー（社会学論集）』（ガースとの共訳）（一九四六年）等をとりあげて、ミルズがアメリカの知的伝統を継承しヴェーバを始めとするヨーロッパ社会科学に触発されつつ、自らの知識社会学、社会行為論、権力論、批判的社会理論に関心を深めていく過程が跡づけられている。

「メリーランドからコロンビアへ」　ミルズは、アメリカ合衆国の戦争介入に反対していたが、一九四一年から四五年まで社会学助教授として東部のメリーランド大学で教えた（二五―二六頁）。一九四五年以降はコロンビア大学に移る。その社会学部には、R・リンド、R・マッキィバー、P・ラザースフェルド、R・マートンなどの数多くの著名な学究がおり、コロンビア大学はドイツから移住してきた学者達の基地にもなっておりフランクフルト学派の亡命者達による社会調査国際研究所が設立されていた（二六頁）（M・ジェイ著、荒川幾男訳『弁証法的想像力』、みすず書房、一九七五年参照）。リンドのミドルタウン研究、『何のための知識か』（一九三九年）とミルズの『ホワイト・カラー』『パワー・エリート』、『社会学的想像力』等にみる関心や考えが符合するところが大きいし、またマートンとの関係についてもマルクス、マンハイム、ヴェーバー、デュルケムを中心とした知識社会学への関心、社会構造とパーソナリティの関係構図等においても重なり合うことが多い。特にラザースフェルドが関係していた「応用社会調査研究所」を通じてミルズは労働組合調査、移民調査、ホワイト・カラー、パワー・エリートに関する資料蒐集を試みた。

一九五〇年代中頃から一九六一年までミルズは、ソ連、フランス、スカンジナビア、イギリスなどヨーロッパ、そしてラテン・アメリカに広範に旅行を続け、世界政治における(一)核戦争

の危機（ミルズ著『第三次世界大戦の原因』一九五八年）、(二)富める国と貧しい国との関係（『キューバの声』一九六一年）という二つの問題に次第に関心を寄せていった（三〇頁）。

そして一九五〇年代にはミルズはすでに自らを急進的な社会学者（a radical sociologist）として位置づけており、マルクス主義にも強い関心を向けていった（『マルクス主義たち』一九六二年）。彼はマルクス主義者を(i)「俗流マルクス主義者」（vulgar Marxists）――マルクスの政治哲学のイデオロギー的側面をとらえ、この側面がマルクス主義のすべてであると見なす――、(ii)「詭弁的マルクス主義者」（sophisticated Marxist）――社会の一つのモデルとしてのマルクス主義、およびこのモデルを使って展開された諸理論に関心をいだく。かれらにとっては、評価にあたいする「社会科学」は存在せず、たゞマルクス主義社会科学があるだけである――、(iii)「率直なマルクス主義者」（plain Marxists）――（マルクスに賛成か反対かは別として）マルクスおよびマルクス主義を古典的伝統の不可欠のものとして受け継ぎつつ、他の偉大な人びとに対するのと同じように学問的なしかたで取りあつかう。マルクス主義のもつヒューマニズム、すなわち歴史形成の過程における人間の意志作用―自由―を強調する――、という三の理解の仕方を示しつつ（三四―三五頁）、ミルズ自身は第三の「率直なマルクス主義者」に半ば支えを求めつつも「マルクス主義的人間主義によって刺激された、急進的なプラグマティズム」（三六頁）という基本的な知的視座をもって世界に生き、戦い貫いた知識人、文化的職人であった。

次の第二章「知的職人」では、ミルズの主要な著書をとりあげて、関連する文献や他の人々の研究書等にも言及しつつ解説を試みている。その具体的な内容としては、(1)「知的職人の技能」、(2)「ミルズの文体と語彙」、(3)『社会学とプラグマティズム』、(4)『性格と社会構造』、(5)『新しい権力者』、(6)『ホワイト・カラー』、(7)『パワー・エリート』、(8)「ラテン・アメリカとの結びつき―『ピエルトリコ人の旅』『聞け、ヤンキー！』」、(9)『第三次世界大戦の原因』、(10)「ミルズと古典的伝統」がとりあげられている。

まず、(1)と(2)では、ミルズの研究、著作活動の全体を特徴づけている「知的職人の技能」、「ミルズの文体と語彙」に言及している。ミルズは『社会学的想像力』の中で付論として「知的職人論」を書いているが、社会科学者は、実際の技能として使用可能な方法と理論とを合せもった「よき職人であれ」とすすめる。「職人は頭と手、知識と経験とを共に使う。彼等は伝統に従いながら、しかしまた革新していく能力をもっている」（三七頁）。また、彼は、データ処理や概念構成に際しての交差的分類技法（the technique of cross-classification）の重要性を指摘している（三九頁）。問題状況をどのように、どのような諸相において照らし出していくか、この技法は新しい概念構成、新たな視座、さまざまな分析方法をたえず革新させることを可能にする知的職人の技法でもある。

更に著者エルドリッジは、ミルズの書物に著しい特徴としてみられる「挑戦的な」書き出し、「神秘的」で「簡潔な」「示唆的」な見出し、「合理性をもちながら理性をもたない人間」「エリートと大衆」等のように対照的用語法、機械工学的な隠喩、根づよく徹底して醜聞を暴き出しいこうとする伝統、悲観主義的な論調などを挙げている。

(3)『社会学とプラグマティズム』、(4)『性格と社会構造』は、ミルズの生涯の前半期における哲学思想、知識社会学の形成、社会学理論の構成を知るうえで重要である。前書はもともとミルズの博士論文 (A Sociological Account of Pragmatism, unpublished Ph. D dissertation, 1942) であったものをミルズの死後にI・L・ホロヴィッツが改題して『社会学とプラグマティズム』(一九六四年、邦訳一九六九年) の題で出版されたものである。この書物の中で、ミルズは特にパース、ジェームズ、デューイの三人の哲学としてのプラグマティズムをとりあげて、更にT・ヴェブレン、G・H・ミードとの関連にも眼を向けて知識社会学的な観点から検討を加えている。プラグマティズムが人間の運命を統禦するうえで人間の知性のもつ潜在力を強調し、社会批判の基礎を提供し、一般市民や政治との結びつきの重要性を指摘しているという点で、ミルズはプラグマティズムの遺産を共有するけれども、その個人主義的で、しかもある階級に限定的な解決のしかた(中産階級のイデオロギーの表現でしかない)の適切性を否定していた(五三頁)。ミルズは、社会構造論、権力論、現代社会分析、知識人論にも視野を広げていくことになる。

H・ガースとの共著『性格と社会構造』(一九五四年) は、「社会制度の心理学」という副題をもつ社会学テキストである。生命有機体、肉体的構造、人間、性格構造、役割、制度、制度的秩序、局面、社会構造を相互関連づけて、すなわち大枠で「性格構造—役割—社会構造」を相互に関連づけていこうとする試みは絶えず新鮮なのである(五四頁)。前書を引きついで個々人のリアリティや社会的現実は「社会的構成」とみなされている。更に社会的役割や言語をめぐっても、バーガー=ルックマン『現実の社会的構成』(一九六六年) を引用してミルズのこの書との共通性を指摘している(六一頁)。そして構造社会学と深層心理学とは並行しているものであり、しかも「……社会構造は歴史的に存在し、構造的単位についての諸研究は社会変動の脈絡においてのみ確定し得ることを想起させる」(六一頁) としている。

さて、(5)『新しい権力者—労働組合幹部論—』(一九四八年、邦訳一九七五年)、(6)『ホワイト・カラー』(一九五一年、邦訳一九五七年)、(7)『パワーエリート』(一九五六年、邦訳一九六九年) は、ミルズの階級三部作ともいわれるもので、労働組合指導者、中間諸階層、権力上層部の分析を通じて現代社会の問題状況を鋭くえぐり出したものである。いずれもミルズの階級論、権力論、現代社会論を理解する上で重要な著書である。

「合衆国がおこなうことややりそこなうことが、世界で何

がおこるのかの鍵になっているとすれば、組合指導者がおこなうことややりそこなうことは、合衆国で何がおこるかの鍵になっているといえよう」（『新しい権力者』訳書三頁）

「われわれは組合指導者をアメリカという舞台の一部としてとらえ、かれを現代社会全体のなかで生起しているものと関連づけようとした。組合指導者を人間として、また社会行為者として理解するためには、われわれはかれが活躍している世界を理解しなければならない」（同書、九頁）

こうした労働組合指導者（新しい権力者）についての舞台設定とその接近のしかたは、ホワイト・カラーやパワー・エリートの場合にも共通している。三部作を貫いているミルズの問題意識は、アメリカ、そして世界における民主主義のゆくえに対する不安であり、人間が、「洗練された保守主義者」のもとで次第に軍事国家の操作的な要員（兵員）とされ、不況―好況―戦争という熱狂的状態に組み入れられていくような社会になることを食い止めることにある。ミルズの眼には、食い止める「責任をひき受ける準備にかけ、またひき受けようとしない」組合指導者として、「新しいあわれな人々」（the new little people）であるホワイト・カラーとして、底辺における無力で疎外された大衆社会として写し出された。そして、現代アメリカ社会の頂点はますます統一され、往々にして意識的に相互調整されていく権力エリート層を照し出した。「ミルズの描写は、たとえ誇張的で、常に実証されるものでないとしても、社会科学者が長く当然視してきたことを全体として再びとらえ直すように彼らに刺激した」といえる（八九頁）。ミルズ死後のキューバ危機、ベトナム戦争、カンボジア爆撃、ウォーター事件にしろ、またその後の「戦争から経済停滞へ」、「高い失業率」、「軍国主義的姿勢」等についてもミルズの予想した不安が現実のものとなってきている、と著者エルドリッジは指摘している（七一頁）。

ミルズの現代社会についての関心は、ますます世界との関連にも広げられていく。(8)「ラテン・アメリカとの結びつき――『ピエルトリコ人の旅』（一九五〇年）、『聞け、ヤンキー！』（一九六〇年）――」、(9)『第三次世界大戦の原因』（一九五八年）は、アメリカ合衆国とラテン・アメリカ、中南米との国際関係、世界における冷戦下の、特に両大国の軍拡の、状況に対する社会科学者としてのミルズの危機意識と良心から書かれた警告の書、啓蒙の書とでもいうべきものである。

ミルズ、C・セニオア、R・K・ゴールドセンの共著である『ピエルトリコ人の旅―ニューヨークへのもっとも新しい移住者―』は、主にニューヨーク市マンハッタンのスパニッシュ・ハーレム、ブロンクスのモーリサニアの両地区のピエルトリコ人一、一一三人の面接調査をもとに、移民労働市場とその移民に及ぼす社会的影響（結果）が分析され、従来の「順応」仮説的な「坩堝」論（'melting pot' theory）や「文化的多元主義」理論（'cultural pluralist' theory）を批判し、むしろ制度化された人種主義であ

り（九二頁）、合衆国と移民本国・移民・移民社会との関係が第一世界と第三世界との関係として構造化されていると指摘する（九三頁）。『聞け、ヤンキー！』は、合衆国がこれまでの第三世界援助政策、冷戦戦略、ラテン・アメリカ封じ込め政策を再考する好機として新しいキューバ革命をとらえ直すように、キューバ革命の声を伝えようとしたものである。そこには、また、「いかなる制度、人間、地位、運動、あるいは国家に対しても無条件の忠誠心を付与することはできない」とするミルズの信念と合衆国自らの革命的伝統が生きづいているとする（九五頁）。

更に、同様の脈絡から、（『第三次世界大戦の原因』の中で）ミルズは両超大国の特にパワー・エリートの戦略を激しく糾弾する。「第三次世界大戦の直接的な原因は、それに備えることである」（一〇〇頁）と共に、その戦略的な原因は致命的な均衡合戦である。今日の全体戦争は、市民生活の防衛のためという考え方を茶番狂言とするものでしかなく、終局には人類の全滅であるとする。ミルズは選択的政策として、相互交渉の必要性、中共と他の共産主義国の承認、中東、ラテン・アメリカ、東南アジア、アフリカでの軍鑑の港内出入禁止、ヨーロッパ諸国に対する一方的軍縮奨励、全ての核実験停止と現貯蔵核の削減策、合衆国以外の全ての軍事基地と軍事施設の廃止、ヨーロッパ諸国の中立化等の提案をもってソ連との交渉に入ることを、この当時の時点で示していた（一〇一頁）。これらの予言的な考察には驚かざるを得ない。ここでも、ミルズは知識人の役割、政治的責任を強調する。

最後の(10)「ミルズと古典的伝統」では、主として編著『人間のイメージ』（一九六〇年）と著書『社会学的想像力』（一九五九年）とをとりあげて、同時代の公共な問題と個々人の個人的な問題とを関連づけ、人間理性の応用と人間自由の成長とを結びつけていくという古典的な社会分析の伝統を現代の社会学者、社会科学に如何に生きづいた伝統として確実なものにしていくかという問題から編纂され、書かれたものである。前書はリーデングスであり、その伝統的な知的源泉として、スペンサー、マルクスとエンゲルス、デュルケム、ヴェーバー、ジンメル、ミヘルス、モスカ、パレート、マンハイム、シュンペーター、ヴェブレン、リップマン、トマスとズナニェッキー等の著作が収録されている。

終章の第三章「結論――主要な社会学者か？」は、この叢書の試みに照らして著者エルドリッジの一応の結論づけが整理されている。ミルズの評価をめぐっては、賛否に両極化しがちである。

ミルズに対する否定的、消極的評価にみられる論調の中には、かなり激しいものもある。E・シルズはミルズを評して「言葉遣いの荒い口論家」（a rough-tongued brawler）であるとして（一〇九頁）、ミルズから何も学ぶものはないし、抑制と礼儀を欠いており、社会学におけるある種の Joe MaCarthy あると呼んで、敵意、侮辱すら向けている。また他にも「ミルズは現代ア

メリカ社会学にとって少しも重要性をもたない」（リプセットとスメルサー）、「通俗社会学の典型的人物」（D・ベル）、「ネオ＝マキァベリアン」（R・フリードリッヒ）等の批判、非難があげられている（一一〇―一一二頁）。

しかし、本書の著者エルドリッジは、I・ホロヴィッツ等による評価と共に、ミルズを鍵となる「主要な社会学者」の一人として称賛し結論づける。(i)「ミルズによるアメリカのプラグマティズムとヨーロッパ社会学の融合は、知識社会学の革新的研究へ導いた」（一一二頁）。(ii)「全くの短い研究生活の間に彼がなし遂げた研究領域に対して、絶大な称賛が向けられる」（一一二頁）。各研究はそれぞれ強さと弱さをもっているし、何よりも巾広い読者層をもっていた。(iii)「非常に重要なことに、彼の仕事が他の人々に与えたさまざまの種類の知的刺激」（一一二頁）があげられる。例えば、階級論、権力論、軍産複合論等をめぐってのR・ダーレンドルフ、S・ルークス、S・ローゼン、また社会研究における批判的接近の重要性、発展理論や第三世界論をめぐってI・ホロヴィッツ、M・シタイン、A・グールドナー、P・ウォズレィ、その他等への合衆国の国内、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、その他にわたる広範な影響が指摘されている。以上の指摘を通じて、著者は「ミルズは、困難な時代に生きた（我々も今日そうであるが）、論争的な社会学者であった。彼の仕事は今なお価値あるものである」（一一四頁）と位置づける。

(三)

本書『C・W・ミルズ評伝』を通じて著者エルドリッジが、現代社会学のさまざまの動きがみられるなかで、可能なかぎりミルズの仕事の全体像に光をあてて再評価しようとした試みは、一応成功しているといえよう。もちろん、ミルズについての他の研究書、例えばH. Aptheker; The World of C. Wright Mills, 1960, J.A. Scimecca; The Sociological Theory of C. Wright Mills, 1977, H. Press; C. Wright Mills, 1978, I.L. Horowitz; C. Wright Mills, An American Utopian, 1983, R. Tilman; C. Wright Mills, A Native Radicals and His American Intellectual Roots, 1984. に較べれば、小著で、簡略に扱われてしまっている箇所も多いが、ミルズの業績を評価する視座からの、簡潔ではあるが、広い見識と鋭い洞察力に支えられた研究書、啓蒙書になっていると思う。

特にミルズの「知的職人」論に従って、ミルズ自身を知的職人として理解しての全著作についての批判的な解説を試みているのは極めてユニークである。その際に著者エルドリッジは、一つにはミルズの思想形成に焦点をあててプラグマティズムを中心とした知的伝統とヨーロッパの批判的社会思想との融合を軸に、更にもう一つには市民生活と社会科学との関連をめぐってのミルズの間断のない鋭い急進的な問題提起と分析、世界への関心を他方の軸にして、分り易く概説している。他の古典的

社会理論家・思想家・潮流とともに、今日C・W・ミルズを鍵となる「主要な社会学者」として再評価せしめる視野と契機をわれわれの前に提示しているといえるだろう。

だが、小著とはいえ、欲をいえば、もう少し言及して欲しい諸点がないでもない。(i)ミルズの思想形成、市民生活と社会科学の関連をめぐって、ミルズの生涯にわたる生活環境、生活史等とも結びつけて考察していければ、もう少し生き生きとしたミルズ像、全体像が探り出せたのではないだろうか。(ii)第三章の終章部分の要点整理のしかたにも関係するが、ミルズ社会学・社会科学の継承と批判という点で、もう少し何が継承され何が批判されなければならないのかについて明確に言及しておいてもよかったのではないか。(iii)そのことは、また、現代社会学の諸潮流に対してミルズ社会学をどのように位置づけるのかという視点が必ずしも明確でないことと関連している。ミルズが、社会学的想像力の喚起を通じて、いわば一括して包装化された「パッケージ社会学」や構造＝機能主義理論に対する批判の先鞭をなし、一九六〇年代に始まるニュー・ソシオロジー、ラディカル・ソシオロジーの先駆的役割を担ったとしても、その後の現代社会学の諸潮流とミルズ社会学はどのようにかかわるのか、諸潮流をどのようにとらえ直すのか、がもう少し触れられるべきではなかったろうか。まさに、ミルズのいう「漂流と突進」(drift and thrust)が問われるところである。

わが国においては、ミルズの著作は一部を除けば、その大部分が邦訳されているけれども、その殆んどがそれぞれ個別にその巻末に「訳者あとがき」として極めて簡略にミルズを論じているにとどまっており、少著ながら本書のようにミルズの全体像を浮き彫りにする試みはいまだになされていない。評者は、ミルズ研究はわが国においてももっともっと盛んになるべきだし、ミルズの提起した鋭い、重い課題は依然として新鮮であり重い荷を分ち合うべきであると考える。

いずれにしろ、本書はミルズ社会学の全体像を再発掘しようと試みた、示唆に富む一読の書であることには変りない。

川合　隆男